

[原著論文]

島の栽培植物と寺院の観光資源としての価値に着目した学び ——沖縄県石垣市の小学校4年生への出前授業を通して——

寺本 潔

要 約

沖縄県の石垣市（石垣島）は八重山観光の中心であり、新空港の開設（2013年）に伴い、近年入域観光客数が124万人と急増している。川平（かびら）湾などの景勝地が有名であるが、島には多くの観光客に未だ知られていない、一般住宅の庭に栽培されている命草（ぬちぐさ）と呼ばれる有用植物（ハーブ類）やシークワーサーなどの柑橘類が生えている。さらに最南端の寺院・桃林寺境内に権現堂という美術価値も高い木彫りの彫刻を備えた文化財もある。それらは街中に点在しており、「まちまーい」と呼ばれる歩く観光が楽しめる可能性に富んでいる。リピーターも多いため、これらの資源を活用すれば川平湾や玉取崎だけの景勝地観光に偏りがちな傾向を是正できる。こうした島の新たな価値に気付かせる学習を通して、当地の児童に自文化理解を促す筆者自身による観光の出前授業を実施した。

キーワード：栽培植物、文化財、観光学習、地域資源、まちまーい

I はじめに

「日本最南端の自然文化都市」このキャッチフレーズに違わず、今や年間の観光客入域数が124万人を越すようになった沖縄県石垣市（人口4.9万人）は、八重山諸島の主島、石垣島と同じ範囲であり、県内屈指の観光地に発展している。この発展を支える背景は、新空港の開港と大型クルーズ船による中華圏からのインバウンドである。日本全体でも訪日客の5人に4人はアジアからの訪日であり、石垣島の地理的位置からもその傾向はとりわけ顕著になっている。石垣港に毎週のように着岸する大型船から千人を越す観光客が下船している。石垣島だけでなく、次第に近隣の離島（竹富島や小浜島）にも足を伸ばす客も見られ、大きな観光需要を生み出しつつある。日本人観光客も中高年を中心に団体で訪れるケースも見られ、八重山観光のブームが起こっている。

ところでこの出来事を教育関係者はどのように受けとめ、これからの観光地としての将来像をどのように頭に描いているだろうか。豊かな自然景観と周辺離島への旅、島の食材や島料理、

祭りや芸能などの伝統文化を楽しむ体験・滞在型の観光も提案されつつあるが、未だ受け身にとどまっている方も多いのではないだろうか。これからの八重山・石垣島観光の在り方を模索し、未来に向けて、世界の観光地と肩をならべていくにはどのようなプログラムが必要になるのだろうか。教育が担う部分はそれを行う人材の育成である。

勢いのある八重山観光を持続発展性のあるものにし、リピーターを増やし、真に行って良かった、また訪れてみたい、心に残りしみじみと幸せを実感できる旅行にしてもらえるにはどうしたら良いかという事を子どもたちに考えさせ、次世代教育として観光教育を意図し教材開発を筆者は試みた。あらかじめその為に、当地の観光教育ビジョン（目指す子ども像）を思い描き、以下の3点を島の教育関係者に向けて提示し協力を仰いだ。

- ・八重山の自然と文化を尊重できる子ども
- ・観光にかかわる産業について理解ができる子ども
- ・訪問者が八重山ならではの豊かな時間を楽しめるために、自分に何が出来るかを考える子ども

この3点を目指して観光学習を展開することは、沖縄県や石垣島の魅力が再発見され、故郷に愛着や誇りの持てる子に育つことにつながる。また、産業としての観光や関わる人々への理解を深め、将来の観光や関連産業の担い手を育てるねらいもある。地域の一員として自分に何が出来るかを考え、主体的な学びを促すことは「社会に開かれた教育課程」の実現につながる。

Ⅱ 八重山観光の起点、石垣市の観光資源

1 観光の動向と八重山の魅力

石垣市の観光資源を論じる前に、我が国の観光を取り巻く動向について考えてみたい。平成28年は訪日外国人観光客数が2403万人を超えた。この数は日本人の海外旅行数（1711万人）を大きく超えている。日本政府観光局の推計によれば、1位中国、2位韓国、3位台湾、4位香港、5位アメリカの順で訪問者の国籍が並んでいる。アジアの中間層の成長と観光人口の増加は著しい。とりわけ、九州の博多港や長崎港、那覇港、石垣港への中国発クルーズ客船の大量寄港にもっと注目すべきであろう。中国人の個人観光ビザの発給要件が緩和されたことも追い風となり、割安な船旅で日本への旅行を楽しむ中流層が増えている。

さらに、昨年函館まで新幹線が延伸したため、北海道の人气が高まりつつある。北海道は近代に入って開拓された国土である。近代化というフレーズは、富岡製糸場や軍艦島を始めとした近代化遺産を思い付く。もちろん、代表的な観光地である京都・奈良の街並み・文化財、北海道や沖縄県の自然美、小京都である金沢や萩・高山等もさらに日本人や訪日外国人問わず、人気を集めていくだろう。これらの観光の動きを教育界でも是非活かしたい。社会の変化に敏

感な教師たちによって、次世代の地域人材である子どもたちに対し、観光による持続的な地域の発展に寄与できる「観光のまなざし」を育成してほしい。「観光のまなざし」の要素として訪日外国人の視点が理解できているか否かは重要である。自分が海外に行ったときに「困ること」「食べたいもの」「見たいこと」「事前に知っておきたい情報」「その国でしか体験できないこと」などのニーズやウォンツを逆の立場から思考できることこそ、大事な資質能力である。外国人観光客の気持ちを考えようとする姿勢は、これからの日本人に必須の能力であることにもっと着目する必要がある。受け入れる側の石垣市民も訪日客の生活習慣や考え方、異文化の価値観を理解しようとする意識と配慮・能力（会話力）が必要となってくる。日本式のおもてなしを一方的に押し付けても高い満足感が得られないケースもある。プライバシーや自由を第一に考える国の人々には、あえて何もしないことも大切なおもてなしになることを知っておきたい。

グリーン（ブルー）・ツーリズムという観光がある。都市から農漁村に出かける滞在型の旅である。受け入れが成功している地域では、必ず人と接することに長けた人材が住んでいる。困ったことに、人と多くは接触しない農・漁業とは180度対極に位置するのが、観光産業である。だからこそ、これからは農漁村でこそ人の気持ちが分かり、呼び込む努力と豊かな言語力が欠かせない。また、沖縄県八重山のような離島の特性を生かした観光は、地方創生のためにも、その担い手を地元において育成することが急務である。島のリゾートホテルで働く人材が、地元からでなく県外からの移住者によって占められつつある傾向に歯止めをかけなくてはならない。

真っ先に取り組みなくてはならないのは、地元ならではの資源の再発見や資源を新たに創り出すことのできる人材を育成できるしくみをつくることである。公教育においてそれを実施するとすれば、「総合的な学習の時間」や特別活動の領域が最も適しているものの、教科としては社会科が担うべきであろう。小学3・4年の社会科単元「ものを生産する仕事」「ものを売る商店の工夫」「昔から受け継ぐ年中行事」「わたしたちの県の特産品」「外国とつながる地域」は、いずれも観光を内容理解に介在させた方が前向きになる。5年単元「暮らしを支える情報」「環境を守る」も観光情報やエコツーリズムを扱えば断然面白くなる。6年単元「戦後の暮らし」も沖縄海洋博以降の八重山観光のあゆみを題材に島の発展を考える社会科学習が可能である。

中学社会科に至っては地理的分野や公民的分野に「日本の諸地域」や「まちづくりと住民参加」の単元がある。職場体験実習と相俟って地元の観光産業と地域づくりをプロジェクト学習として学べるはずである。高等学校においては観光系の実業高校（例えば、八重山商工）ではもちろんであるが、普通科を有する高校（例えば八重山高校）においてもっと観光を題材に取り込めるはずだ。なぜなら、観光系の就職先を選ぶ高卒や大卒の生徒・学生は必ずしも観光系の学科を卒業した者でないケースが多いからである。また、高校で普通科を選んだ生徒でも、大学進学の際、観光学部を選択する場合もある。

次の表1は、農漁村地域で発見できる資源とその観光教育的価値を筆者が整理したものであ

表1 農漁村で発見できる地域資源とその観光教育的な価値（寺本作成）

地域資源（観光対象）	具体的な要素・学習材	観光教育的な価値
田園・里海景観 （日本の原風景）	灌漑水路，屋敷林，棚田，浜と魚付林，猪垣	故郷，癒し，くつろぎ，工夫，自然との調和
伝統的な建造物 （文化財）	神社，寺院，古民家，散居村，防風石垣，合掌造り	レトロ，素朴さ，本物，大家族
お祭りや年中行事 （伝統文化）	収穫祭，鳥追い，どんど焼き，海神祭，種取祭，大綱引き	受け継ぐ意識，人手，自然の叡智
安心安全な食 （遺産としての和食）	郷土料理，山の幸・海の幸，特産品，地元のソウルフード	食育，土・海とのつながり，健康，質素
農漁村の生活 （民宿・農家体験）	有機農業，生活リズム，地場産業，家畜	健康，自然の恵みへの感謝，ストレスフリー
新しい農業・漁業 （観光農園）	グランピング，オープンガーデン，ハーブ園，道の駅，ファーマーズ・マーケット	西洋人の趣味，都市との交流，原体験，新鮮さ

る。観光という懐中電灯で地域を照らすことで，地域資源が観光化してくる，いわば資源を眺めるまなざしを獲得できるようになる。

こうした観光の動向を見据えつつ，沖縄県の八重山諸島を事例とすれば，八重山にはこれらの複数の資源が魅力に富んでいるため，有利に働くことが分かる。とりわけ，八重山観光の中心地である石垣市の中心市街地は，豊かな屋敷林と隆起サンゴ礁から採集された珊瑚の石垣や粟石に囲まれた古風な住宅街が広がっており，その中に歴史的な名所・文化財や共同井戸が存在している。また，パパイヤや長命草，オオタニワタリ，ニガナ，月桃，グアバなど八重山（石垣島）特有の植物が個人庭や菜園に生えており，ハーブ（香草）の街としての魅力にも富んでいる。これらの「命草（ぬちぐさ）」とも呼ばれる植物に囲まれた生活様式は，健康や暮らしの快適さへの関心が強い本土の都市圏に住む高齢者が憧れるスタイルでもある。

一方，これまで，ともすれば石垣市の観光は，川平湾や玉取崎などの景勝地見物だけに力点がおかれ過ぎていた。景勝地は曇りや雨天の際，その魅力を発揮できない。したがって，雨天の場合でも観光客が石垣市固有の魅力を楽しんでもらう一種の「しかけ」が不可欠である。その一つの工夫としてホテルから容易に散策できる市街地内の観光ルート（石垣まちまーい）をもっと開発・啓発すべきではないだろうか。

こうした発想から，既にユーグレナモール商店街の中に，「ゆんたく家」という街歩きの案内拠点はあるものの，ホテルに案内チラシが備わっているわけでもなく，また地元在住者向けの広報も進んでいない。石垣島を10数回訪問している寺本でさえ「ゆんたく家」が実施している街歩き観光の存在を今日まで把握できていなかった。

那覇市で人気を博している「那覇まちまーい」に参加したことがあったが，10数名の参加者の半分以上は那覇在住の市民であった。このことは，石垣市民も楽しむことのできる着地型観光として「石垣まちまーい」をもっと盛り立てていく必要があることを示唆している。

おりしも，JTA機内誌『コーラルウェイ』2015年11・12月号は「まちまーい」特集号であっ

た。その中に紹介されている石垣島まちなか散策ツアーの紹介文は、次のような文章である。

「ガイドとともに市場からユグレナモールを通り、古くからの住宅街を歩いていく。琉球王国時代の士族の屋敷である宮良殿内や桃林寺、権現堂といった有名ポイントも訪ねるが、何よりも歩くだけで発見があって面白い。まず驚くのは、地元で大切にされている聖なる場所『御嶽』と井戸の多さ。民家の玄関先からこぼれ出る花々の美しさにも目を奪われる。花だけではない。グアバやバナナ、アセロラといった果実も民家の庭でたわわに実っている。」(p18より抜粋)まさに、石垣市街地こそ、亜熱帯で楽しむまち観光の醍醐味が味わえる観光地なのである。民家のお庭めぐりなど、時期を区切ってオープンガーデン観光をしかけていくことが新たな魅力をもたらすきっかけとなるだろう。

本研究は、次世代の観光人材である地元子どもたちに観光の重要性と主体者意識を考えてもらう寺本による出前授業の記録である。観光知の形成に対しては社会科が最も貢献できる教科であり、接遇態度や企画立案では、総合的な学習の時間が適しているだろう。社会科+総合で、人材育成につながる観光教育を初等段階から推進していきたい。

2 石垣島の観光資源

石垣島は、日本列島の最南端に位置する八重山諸島の中心島である。面積は228.93平方kmあり県内では、沖縄本島、西表島に次いで3番目の大きさを占めている。緯度は北緯24度20分であり、亜熱帯海洋性気候特有の植物が繁茂している。黒潮が豊富なミネラルいっぱいの海水が浜に打ち付け、多様な生物を育てている。降水量も多く、一日の天気の変化は激しい。秋から冬にかけては乾燥注意報が発令されることもある。天然記念物のカンムリワシ、サキシマハブ、ヨナグニサン、オオゴマダラ、セマルハコガメなど石垣島特有の生物も多く、自然環境の魅力がたっぷりの島でもある。人口は、4万9078人(平成27年8月末現在)である。新空港の開港も功を奏し、県外からの移住者も多く、出生率も高いため、人口は漸増を続けている。

歴史を紐解けば、1500年のオヤケアカハチの乱や1637年の人頭税制度、1771年の明和大津波災害、1879年沖縄県設置、1926年石垣村に町制施行、1964年石垣市・大浜町合併などを経て今日に至っている。戦争や災害、マラリア被害など試練を乗り越えてきた歴史がある。1989年のANK(エアニッポン)就航も観光振興のエポックである。海洋博覧会以降の沖縄ブームも相俟って、本土化が著しい沖縄本島に比べ、沖縄文化の原形が色濃く残っている八重山諸島は今後とも大きな観光発展の可能性に富んでいる。

イベントとして1月のマラソン大会に始まり、3月の海開き、4月のトライアスロン大会、7月のみなと祭り、豊年祭、8月のアンガマ、9月のとうばら一ま大会など1年を通して島民が固有の文化を意識する機会が多い。美しい海岸美、珊瑚礁、ヤシ林やソテツ、マングローブ林など独特な緑も目に眩しい。素朴で温かい人柄で迎えてくれる島民、三線や島歌、舞踊などを楽しむ音楽の島、ダイビングやサイクリングを一年中楽しめるスポーツアイランドでもある。

新空港が建設された一昨年以降、観光客もうなぎ昇りとなり、平成26年は1,116,313人もの入域観光客数（ちなみに平成25年は937,024人）に達しており、昨年は120万人を突破した。八重山観光は、まさに新しい時代を迎えつつある。石垣市街地の変化もみれば、歴然である。商店街やその脇の道に新しい店舗が展開しはじめ、若い本土からの移住者による出店、石垣島出身の若者のチャレンジショップなども散見されるようになった。

市内の宿泊所で無料配布されている『石垣島タウンガイドNo. 17』（株）たけしょう発行（95ページ）を紐解けば、「石垣島の景勝地」と題して、次の観光地が紹介されている。川平湾、米原ビーチ、底地ビーチ、フサキビーチ、サンセットビーチ、真栄里ビーチ、名蔵アンバル、御神崎、於茂登岳、国立天文台、石垣島天文台、パンナ公園、唐人墓、桃林寺、権現堂、宮良殿内、野底マーベ、平久保崎、吹通川、玉取崎展望台、宮良川である。

いずれも有名な自然景観や史跡、施設であるが、景勝地と比較して中心市街地にある観光資源の紹介が少ない。市役所がある中心市街地には、御嶽や石垣氏庭園、共同井戸、石垣港離島ターミナル、サザンゲートブリッジ、みんさー工芸館などもあり、歩いてめぐることができる範囲に存在している。これに公設市場や八重山博物館、各ホテルも加えれば、街歩き型の観光スポットめぐりが中心市街地内で実現するだろう。

さらに、前述した『タウンガイド』には、石垣島のフルーツもカラーで紹介されている。マンゴーやドラゴンフルーツ、パイナップル、パッションフルーツ、シークワーサー、島バナナ、釈迦頭、パパイヤ、グァバ、レンプ、カニステル、スターフルーツが美味しそうな写真入りで紹介されている。これらも立派な観光資源である。しかし、これらのフルーツが一堂に食することのできるパーラーや果物園が市街地にはない。もっと興味深い記事は、「石垣島の健康食材」である。パパイヤはもちろん、ハンダマ、ヨモギ、ウコン、島とうがらし、田芋、しょうが、アロエベラ、島ニラ、トウガン、レモングラス、ヘチマ、黒糖、紫やまいも、島らっきょう、オクラ、島ニンジン、ゲットウ、ウイキョウ、シークワーサー、ニガナ、グァバ、長命草の23種が紹介されている。まさに健康志向の食材だらけである。

3 地図帳で学ぶ観光資源と観光授業の方法論

沖縄県の地図を例にして観光がいかに地域理解に有効であるかを確かめたい。沖縄県は県内に三つの国立公園や国定公園を有する美しい自然美あふれる県である。そのため地図帳で様々な土地利用を表す記号や産物を示す絵記号を見つけることができる。「さとうきび」、「パイナップル」、「きく」などが容易に児童用地図帳の中で見い出せる。沖縄県は、地元の児童が県の様子を学ぶだけでなく、全国の児童が社会科第5学年「暖かい土地のくらし」の事例地として学ぶ県でもある。それに先立つ第4学年の3学期に扱う社会科単元「わたしたちの沖縄県」は地元再発見の単元であり、約30時間の時間が割り当てられる。まずは、この単元を観光単元として組み替えることで効果的な社会科指導が実現できるのではないだろうか。

この単元の冒頭で扱う「47都道府県の中の沖縄県の位置や沖縄県の地理的概要」について学ぶ場面において、国内での沖縄県の位置そのものが観光要素（観光には未知の領域への移動が必須であり、本土から離れていることそのものに魅力がある）であり、県外と異なる自然や産業こそ、観光から見た沖縄県の特徴といえる。

また、文部科学省学習指導要領で扱われる「自然や伝統を生かした県内のまちづくり」の事例は、観光に特化して描き出せる。最後の小単元「国内外と県とのつながり」においても、観光を通してつながる話題を扱えば、単元の目標は達成できる。従来どおりに県の地形、人口、交通、産業、姉妹都市提携などを項目別に学ばせるだけでは学習が静的であり、「問い」が生じにくい。つまり、問題解決学習にはなりにくい難点がある。そこで、観光という視点をこの単元に導入することで、活性化できると考えた。

次に、指導方法につながる方法論の一つに触れてみたい。観光客が求める楽しみである「自然、食べ物、歴史、生活文化、イベント、施設」の6つは、同時に県スケールの観光資源を調べる窓口にもなる。今回、石垣市立石垣小学校で寺本は、1クラス計6時間の出前授業を2クラス行った。下の資料は、石垣小学校で実施した冒頭2時間分の指導案である。石垣市の観光統計で判明した「石垣市を訪れた人の数、平成26年は112万人」という数字を児童に提示し、「どうしてこんなに多い数の人が石垣市（八重山地域）を訪れているのか」を学習問題として設定し、考えさせた。児童は案外、自県のよさを客観的には捉えていないものである。実際の授業では、冒頭に「観光」という用語の意味（その土地の光る優れたものを観る）に触れ、先にあげた6つの窓口の言葉を黒板に貼り、島内の具体的な観光地や観光資源と符合させていった（写真1～3）。

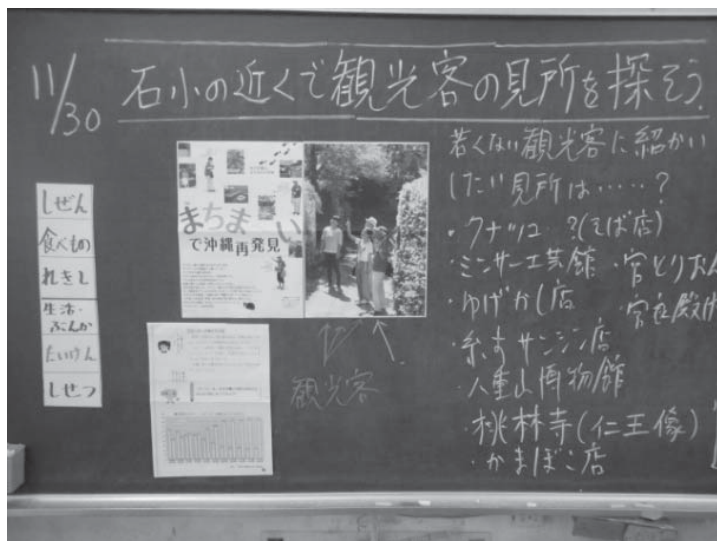


写真1 「学校の近くで観光客の見所を探そう」を学習問題にした寺本による板書

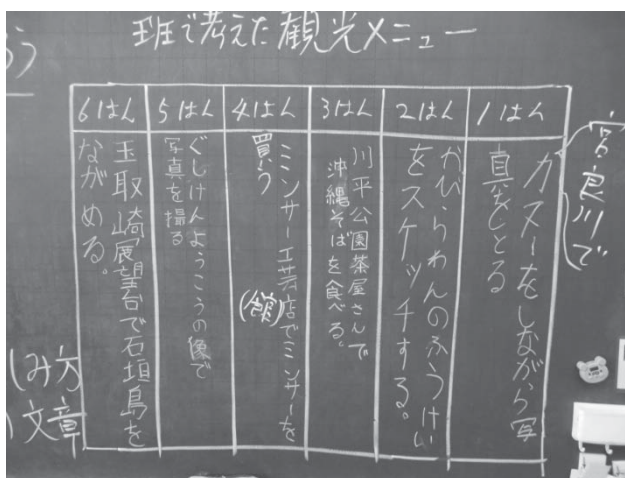


写真2 石垣島の観光資源を班ごとに考え発表する場面（写真上）と班で考えた観光メニュー（写真下）

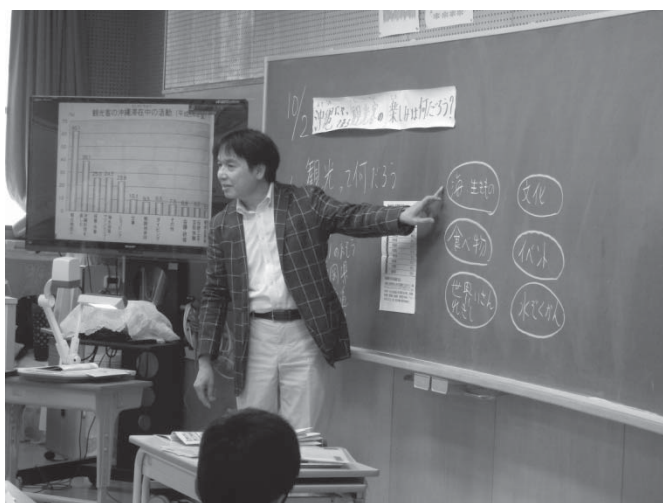


写真3 沖縄観光が人気NO.1であるわけを考える授業の様子

解説：「観光客の楽しみは何だろう。」と切り出し、観光資源を示す6つの要素から明確化する筆者（左手のスクリーンには観光客の沖縄滞在中の体験メニューがグラフ化された資料を映し出している）

第4学年社会科・観光授業指導案

平成27年11月30日（教室）

12月1日（校外）

授業者 寺本 潔（玉川大学）

●本時の目標

八重山地域の主な観光地やリピーター客が増えている近年の傾向を知り、旅のイラストカード（寺本自作）をヒントに、観光客が楽しめる観光滞在プログラムを作成することができる。また、遠くの川平湾や西表島に行かなくても身近な市街地で観光客に楽しんでもらう新たな観光資源の存在に気付くことができる。

●指導計画（全7時間）

- ・八重山の観光について考えよう（*本時11月30日1・2・3・4限） ……2時間
- ・近くの石垣市街地で新たな観光資源を探そう（12月1日2・3限） ……2時間
- ・観光客に紹介するコラージュ作品をつくろう（12月1日5・6限） ……2時間
- ・振り返り作文を書こう ……………1時間

●本時の展開（4年1組は1・2限，4年2組は3・4限 各2時間続き）

（1時間目）11月30日

	学習活動	指導上の留意点
導入 3分	1 八重山を訪れた訪問客（観光客）が年間112万人と多い事実を知り、何を楽しみに112万人もの観光客（リピーター）が石垣島を訪れるのかについて考える。 ・川平湾のきれいな海を見に来る。 ・マングローブ林が人気らしい。 ・竹富島の赤瓦の古い建物を見に行く。 ・ダイビングや釣りにくるのでは？	・「観光」の言葉の意味から、観光客は本土にはない魅力を石垣島に求めているのではないかと補足する。 ・八重山の観光統計や旅行パンフレットを提示し、新空港ができてぐんぐん伸びている事実気付かせる。
展開 35分	2 観光が分かる6つの窓口（自然・食べ物・歴史・生活文化・イベント・施設）を石垣島に当てはめて考える。 ・川平湾・マングローブ・八重山ヤシ林⇒自然 石垣牛のステーキ・八重山そば・フルーツ⇒食べ物 オヤケアカハチの乱・桃林寺・唐人墓⇒歴史 アンガマ・豊年祭・三線・上布⇒生活文化 コンサート・トライアスロン・マラソン大会⇒イベント リゾートホテル・バナナ公園・ユウグレナモール⇒施設	・夏場が多いが年中来ている。 ・沖縄県作製の観光副読本『めんそーれー観光学習教材』のp11を開かせ、リピーター客が8割を占めている事実にも触れておく。 ・タウンガイド掲載の石垣島の略図を提示し、観光地を確かめる。
まとめ 7分	3 寺本が用意したイラストカードを4人1班で囲み、観光地+動詞の組み合わせで八重山における観光客の新しい楽しみ方（文章）を考え、ノートに各自書き出す。 ・例「川平湾で遊覧船に乗り、綺麗な海を見る。ランチに八重山そばを食べてその後、ヤシ林で環境音を聞いてのんびりする。」 4班で一押しプログラムを紹介する。	・最低、1人1案考える。 ・友だちのアイデアに相づちと感嘆の声をあげるように勧める。 ・班ごとの記入欄を板書で準備する。 ・具体的な観光資源や地名が書かれているか確かめさせる。

(2時間目)

	学習活動	指導上の留意点
導入 10分	1「まちまーいで沖縄再発見」の写真を見て、何をしている様子か想像する。前時で提示した8割を占めるリピーター客が、一度は行った川平湾や竹富島でなく、まちなかで手軽に観光できる場所はないか考える。もし、自分がガイドさんだったら、どんな場所を「お散歩気分」で観光客に案内したいか、石垣小の近所にある観光資源を考え合う。	・「まちまーい」を特集した機内誌『コーラルウェイ』を提示し、寺本自身の体験談も交えつつ市街地散策が観光客にとって人気があることに気付かせる。 ・寺本が撮影した桃林寺や宮島オン、井戸、独特な亜熱帯植物、サンゴの石垣などの画像を見せて、本土からの観光客にとって沖縄らしさを感じる場所であること、観光資源になることに気付かせる。
展開 30分	2 班で相談し案内できる場所を3つか4つ考え合う。 ・いろいろな花や樹木もあるよ。 ・宮島オンや珊瑚の石垣、井戸は石垣らしいのでは？ ・桃林寺には仁王像が2体いるらしい。	・本土からの観光客にとって沖縄らしさを感じる場所であること、観光資源になることに気付かせる。
まとめ 5分	3 普通の家のお庭や敷地に生えている樹木が観光客にとっては珍しいことを知り、次時の校外学習で庭見学もあることを知る。 ・パパイヤやハイビスカス、芭蕉も本土にはないから観光客も喜ぶかも？ 4 使い切りカメラを提示し、次時に見学・撮影に行くことを知る。	・一步前に出て撮る、逆光に気を付けることを補足する。 ・カメラの使い方を解説しておく。

その後、12月1日は、冒頭、島内の植物について田本より10分程度の講話を行い、その後3人1組で校外に出かけ、宮島オン（御嶽）、お庭見学・桃林寺を回り、撮影し、午後はそれらの写真を組み込んで「おーりとーり石小観光ポスター」を作成した。

4 児童が受け止めた観光の導入授業

次の表は4年社会科単元「私たちの〇〇県」の展開を検討したものである。学習指導要領での本単元の位置付けと、筆者も著者として参画している社会科教科書（教育出版）における展開、さらに観光授業の視点に立った筆者の展開案を比較した。単元「わたしたちの県」（30時間完了）は、従来のように単純に自県の地理的特色について地形や交通、産業等と項目別に学び、自然や伝統を生かした地域の紹介にとどまっているだけでは、上記で指摘した地域人材の育成には寄与しない。この単元を観光単元として組み替え、地域の資源化を志向した学習に転換を図ることで、観光振興を推し進めることのできる地域人材の育成を目途にした授業が実現できる。

こうした観光授業の視点に立った展開を採用できれば、従来の項目別に自県の特徴を順に学んでいく、いわば地誌的な扱いに比べ、網羅的ではないものの、観光客の目線を子どもたちに意識させることで、自県のよさを子ども自身がいかにか把握できていないかに気付かせ、新鮮な気付きを促す展開になるのではと予想される。

石垣島に暮らす子どもにとって、観光客は日常の風景である。自分が何も努力しなくても勝手に来訪してくれる訪問者であり、受け身で理解している対象と言える。しかし、石垣市の主

たる財源が観光である事実に気づき、多くの雇用を生み出している現実を知ることでも自分も将来観光を支える人材になりたいと意識できることを期待したい。

表2 社会科単元4年「私たちの沖縄県」の展開の比較表

わたしたちの〇〇県 (学習指導要領上の内容)	小単元の配列 (社会科教科書・教育出版での扱い)	観光教育からの展開案 (寺本の提案)
自県と47都道府県の構成	福岡県の位置と47都道府県の構成	観光客から見た日本の中の沖縄県の位置
わたしたちの県の地形	福岡県内の土地の高い・低い地域について	自県の美しい地形や土地利用からみた観光の魅力
県の様子(交通と人口, 都市)	福岡県内の主要道路と県内の都市の名前	観光客が使う交通網と訪れる県内の市町村
県の様子(主な産業)	福岡県の土地利用や産業について	観光客の目線で見た沖縄県の農漁業や工業
自然を生かしたまち	県内の自然を生かしたまちづくり	自然を訪ねる観光客の楽しみとまちづくり
伝統や文化を生かしたまち	県内の伝統や文化を生かしたまちづくり	伝統・文化を訪ねる観光客の楽しみとまちづくり
他地域と結びつく県内のまち	国内外のまちと交流する自県	沖縄県を訪れる内外からの観光客と文化交流

公教育における観光教育によって期待される効果は、観光の大切さを意識し、観光と関わることを通して地域や日本文化を正確に他者に伝えることのできる能力の獲得である。観光現象への理解、地域の観光振興と自分の行動との関連強化、地域ブランド磨きへの積極的な対応と将来の観光市民への成長に向けた投資、様々な観光をめぐるステークホルダーの役割の認識、そして持続可能な発展を伴う観光振興の実施へと戦略的に観光教育が展開していくことが理想である。

Ⅲ 子どもが見出す資源の候補

1 観光立県、沖縄県において実践した小学校社会科・観光授業

今回、協力頂いた学級は沖縄県石垣市立石垣小学校（西原貴和子校長，児童数328人）第4学年2クラスである。また、先に試行的に沖縄本島に位置する中頭郡中城村中城南小学校4年生においても実験的な出前授業を実施し、その成果は玉川大学教育学部紀要や学術研究所紀要に報告した。ここでは、両校における出前授業を振り返って、沖縄県における小学校・観光授業の内容と方法について検討してみたい。

沖縄県では全4年生児童にカラー印刷の観光副読本『めんそーれー観光学習教材』（全62ページ）が配布されており、国内屈指の観光教育県である。沖縄に多くの観光客がやってきている

事実を学び、観光産業に従事する人々の仕事や接遇に関しても学習できるユニークな内容である。しかし、現実には沖縄県の学力向上（国語科と算数科のみ）に特化した教育政策の影で見落とされがちになっており、検定教科書（社会科）の展開とこの観光副読本の内容とが上手く関連できておらず、約3割の小学校は観光副読本をほとんど活用できていない実態がある（県内小学校200校に向けて筆者が実施したアンケート調査による）。そういう課題を解消するためにも筆者自ら、現地に向いて公開授業の形で地元の教師に観光授業のモデルを見て頂くことが効果的と考えた。

(1) ビギナーとリピーター

副読本『めんそーれー観光学習教材』の中に沖縄を観光で訪れるビギナーとリピーターの推移を示した棒グラフが掲載されている。既に、8割を超える観光客がリピーターであり、その目的は観光地巡りや沖縄料理を楽しむ、マリンレジャー、ショッピングなどが上位4位を占めているものの、第5位に保養・休養が24%もあると表示されている。「何万円もかけてわざわざ休みに沖縄にやってくるわけは何だろう？」というのが子どもたちの素朴な疑問である。よほど、沖縄に魅力がなければ観光客は何度もやってくるわけがない。いったい、どんな魅力が沖縄にはあるのだろうか、と問いが立ち上がってくるのである。そこで出前授業では、自然・食・歴史・文化・イベント・施設の6つの窓口を示して、それぞれの窓口にどのような観光地や観光資源があるのかを確かめさせた。観光という目的的な行動が観光資源を同時に享受する行為となり、その結果、観光地が生まれてくる。観光という営みの本質に気付かせるきっかけとなった。

(2) 開発したイラストカードの効果

2時間目の授業で筆者が開発した26枚の観光客が楽しめる行動を示した絵カード集を提示した。この絵カードは楽しい鳥のキャラクターが観光を楽しんでいる様子を描いたもので、動詞や形容動詞で表現されている。これに具体的な観光地を接合して、「観光地」+「動詞」=観光の楽しみ方のフレーズができあがる。例えば「写真を撮る」と「古民家でそばを食べる」という絵カードを手にして、観光地である首里城と合わせて、「首里城で写真を撮って、その後で近くの古民家で沖縄そばを食べる。」などといった観光客が楽しめる行動を言葉で立案させるのである。

児童の思考過程はこうである。代表的な県内の観光地をまず決めて、そこで観光客が楽しめる行動（観光滞在プログラム）を絵カードから想像し、組み合わせるパターンもあれば、楽しそうな絵カードから入り、そうした楽しみができる観光地はどこかを探させるパターンもある。この作業を県の詳しい地図（地図帳掲載）と絵カードを前にして6人1グループで行った。主体的・対話が生じる深い学びが実現できる。

2 観光資源を磨く・見出す・組み合わせる

さらにレジャーである観光を産業として認知できれば、裾野は広がる。農漁業が生み出す野

菜や果物、肉や魚介類も、広い意味でブランド化や観光資源化を目指している。子ども自身が、身近な地域や県内で見出せる産物を、二つ以上組み合わせる魅力的な商品の商品化を提案型の思考を促せば、意欲的に学び始めるだろう。一方で、観光立国学習が単なるお国自慢で終わることのないように注意しなければならない。観光は観光客側という相手意識に立つことが最も求められる産業である。観光客が何を求めているのか、地域や県のよさをいかに知ってもらうか、自己満足に陥らないように客観視できる見方を養いたい。また、ときとして県民側と観光客側に分かれて役割演技を取り入れ、考案した観光商品を発表させる学習展開も面白い。社会科における教材開発の大きな鉱脈が観光にある。

(1) 石垣島における社会科・観光の授業の概要

- ・ねらい 石垣島の児童にとって日常目にする島独自の生活文化（栽培植物・共同井戸・御嶽等）や観光地（川平湾・マングローブ林）を改めて自覚し“他者から見た島のよさ”に目を向け、観光立島としての石垣島の特色に気付くことができる。さらに、おもてなしの心を持って島文化を紹介することができる。
- ・単元 特設の総合学習 単元「観光を学び石垣を知る」（仮称）もしくは社会科第4学年「わたしたちの沖縄県」を2学期に前倒して題材にする。
- ・時間数 寺本による出前授業 6時間（振り返り作文を書く1時間は除く）

(2) 単元計画（11月30日・12月1日）

■社会科単元を軸に立案した例（写真4～7参照）

第1次 どうして八重山にたくさんの観光客がやってくるの？ 2時間

- ・『めんそーれー観光学習』（副読本）や石垣市観光協会作製のパンフレット、地図帳の活用、筆者が東京で集めた沖縄旅行パンフレットの読み取り
- ・筆者開発の観光客の楽しみカードを使った滞在プログラム文の立案

第2次 本土の自然や生活・文化と異なるわたしたちの島の自然や生活文化の特色はなんだろうか？ 琉球庭（ハーブ）・共同井戸・御嶽を調べよう。 2時間（校外）

第3次 観光ポスターを作ろう 2時間

- 島内の観光資源を見直し、もっと多くの観光客が島内で長い時間滞在してくれるために自分たちはどうしたらいいか考える
- ・写真も取り込んだコラージュ風の手づくりポスター（観光客向けメッセージ入り）の作成



写真4 田本教育研究所長(当時)による栽培植物の説明



写真5 学校近くの神域, 宮鳥御嶽を取材する児童



写真6 事前学習で提示したパワーポイント画像

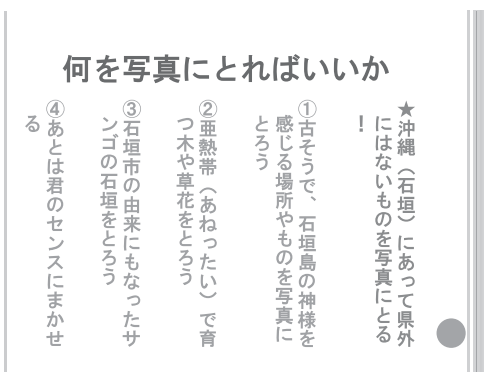


写真7 栽培植物など撮影対象を解説した画像

(3) 資源化とは？

社会のグローバル化に伴い、むしろ地域や日本のよさや個性を意識化させる資源化が必要である。資源化できる見方はポジティブな視点を有する。

例えば、3年生で多く扱われる「昔の道具と暮らしの変化」の単元では教科書に昔の暮らしのイラストが掲載されている。近くに伝統的な民家園やレトロな町並み、屋敷などがあれば、+ aとして見学学習も組まれることだろう。そのとき資源化の視点を取り込んで、「どうして古い道具や建物が残されているのだろうか」という学習問題に発展させるのである。大人は、今は使われていなくても、かつて自分が使った古い道具や訪れたことのある建物に懐かしさを感じるものだ。いや、既に亡くなった祖父母が使ったモノに対しても日本人共通の一種の郷愁を抱く。児童から「古いものが大人は好きだから見に来るのでは。」「古くてもその時代は便利なモノだったから大事なものののでは?」と出てきたら、「入場料まで払って使わない古いモ

ノや建物をどうして見に来るの？」と切り返せばよい。古い道具や建物を残すことに意味や価値があることに気付かせるのである。学習指導要領の扱いでは、暮らしの向上に寄与した道具の変遷に気付かせ、古い道具でもその時点では便利で最新の道具であった事実から、道具を改良して暮らしをよくしていく人の営みに共感させる扱いになっている。「しげん化」では、古い形で現在に残されているそのことの意味に気付かせる。住民や専門家の願いを受けて、保存された理由や観光客も訪れる施設である意味を追究させるのである。他にない地域の資源として民家園や伝統建築、生活道具などの存在意味を理解させていく。古い電気洗濯機や家具調テレビなどは今やお宝である。お宝だからこそそこから道具の改良を重ねてきた日本人の努力がくみ取れる。

(4) 観光のまなざし

事例を変えよう。4年単元「わたしたちの県のようにす」の単元では、47都道府県の中の県、県の地形、交通、自然を活かした県内の特色あるまち、伝統や文化を活かした県内の特色あるまち、県と外国とのつながりといった流れで教科書は編集されている。+ α としての「しげん化」では、自県の存在自体を「しげん化」のまなざしで見つめさせる。例えば、「年間400万人もの観光客がわたしたちの県を訪れています。そのわけはどうしてだと思いますか？」と切り込むのである。写真3は、先日、沖縄県の公立小学校4年生に筆者が出前授業を行った場面である。「沖縄県が観光に人気NO.1であるわけを考えよう」と切り込んだ授業であり、児童の思考はかなり活性化した。

教科書を活用させ、「冬でも暖かい南の県だから」「美しい海や森があるから」「エイサーを見に来るのでは」「ちゅら海水族館と首里城に来る」「特産品で沖縄そばが有名だから」などとポジティブに自県のよさを振り返った。「自然、食、歴史、生活文化、イベント、施設」の6つの窓口から「しげん」を引き出した。「しげん化」を促す問いでは、「もっとたくさんの観光客に来てもらうにはどうしたらいいのだろう」を学習問題にした。

県の自然環境についても他県にみられない価値ある自然として扱うのである。したがって、地図帳などを使って他県と比較させながら、県の地形や土地利用を扱えば効果的である。地図帳で自分の県だけをいくら見させても児童に県のよさは見出せない。さらに、県の伝統工芸品を観光客向けのお土産にしてもらうためには、その価値を他に伝える必要性を感じ始める。自分たち県民もその工芸品を買ったことがない事実気付き始め、「自分たちも買って使いたい」「県の特徴ある自慢としてこれからも作り続けてほしい」とポジティブに自県の資源に気付き始める。まとめの学習で教科書にしばしば「県の特産品マップをつくらう」というフレーズで紙面が構成されているが、「外国人観光客に売り込むための県の特産品紹介マップを作ろう」とか「ゆっくりお客さんに農漁村で滞在してもらうための旅行プランを立てよう」の方が、県のようすを振り返らせる学習にはポジティブで面白い効果が期待される。

(5) 農業や工業、歴史も「しげん」

5年「日本の食料生産」でも米や魚のブランド化戦略を扱えば、「しげん化」に近付ける。

特に米からできる日本酒、味噌や醤油、新鮮な刺身や寿司、活魚輸送のしくみなどは、ニッポンの資源である。東京都にある江戸野菜（諸藩からの野菜の種が集まった）なども格好の資源である。外国人にも人気なクールなニッポンの生産物を扱うことで、農林水産物さえも資源として児童は見つめるようになるだろう。

自動車産業の単元でも、トヨタ生産方式は、観光客にとって産業観光の対象となっている。外国にはないニッポンの工業製品だからである。6年単元の「室町文化」や「江戸の文化」は教科書にも代表的な和室や歌舞伎の写真と共に紹介されている。いわば和文化というニッポンの資源そのものである。そこに「残していく」「継いでいく」「作りだす」などの「しげん化」する意味を取り入れてはどうだろうか。茶道や華道のよさに気付かせ、単に歴史上の文化として学ぶだけでなく、現代に継承されてきた文化である事実にもっと力点を置くのである。改めて考え直せば、600年も500年もその様式が続いてきていることそのものに感動さえ覚える。外国人の方が、盆栽や布団、和食、和風庭園などに関心を抱く今日、「しげん化」の視点は他者のまなざしを意識させ、自文化に自信を取り戻す効果もある。

沖縄県の場合は、ウチナー料理や琉球庭園、亜熱帯植物なども観光資源になる。とりわけ、石垣市内に存在する一般家庭のお庭や通りからも見える塀越しの庭樹は本土にはない特色がある。つまり、「オープンガーデン」観光の魅力に富んでいるのである。

既に沖縄本島の南城市で展開されているオープンガーデンの試みに習い、石垣市街地でこそ、確かなまち歩き観光が楽しめるはずである。天候が不安定な時期こそ、離島に渡れないため、市街地観光が力を発揮するはずである。石垣市内で3箇所程度の個人宅に協力をお願いできれば、実験的にある1週間程度の八重山命草を学ぶオープンガーデンツアーが成立する。本土から来た観光客（年配の方々）と在住のお庭の持ち主が草花を介して交流できるきっかけが生まれる。この動きを拡大できれば、石垣市街地の文化的な評価も向上し、市民に自然と文化に対する誇りが生まれるだろう。このことは、子どもたちの教育にも効果をもたらすに違いない。

Ⅳ 中心市街地を歩いて巡る石小「まちまーい」の授業実践

1 フィールドワークから考える社会科・観光の授業

(1) 歩く・見る・聞く

社会科の学習対象は実際の社会にある。教科書や副読本といった紙面には、そのモデルが掲載されているに過ぎない。実社会の社会事象にこそ、生きた学びの対象がある。3年単元「私たちの学校の周り」はもちろん、スーパーの売り方の工夫、昔から受け継ぐ年中行事、自分たちの町にある農漁業、地域に残る文化財や史跡、公共施設の建設など学習対象は枚挙にいとまがない。子どもたちが地域を歩き、ある視点から町を点検したり、人にインタビューしたり、施設を見学させてもらったりする社会科フィールドワークこそ、新しい研究授業の宝庫である。

今、話題のアクティブ・ラーニングのアクティブそのものがフィールドに出かけて学ぶ姿勢だからである。

石垣小学校で実施した今回の校外授業は、学校の近くに観光客が喜ぶ場所やものがあるのではないかという切り込みから始まった。やや、誘導的な提示であったが、数枚の写真を子どもたちに提示した。

(2) 実施率2割

小学校では上記のいろいろな場面で校外に出かける機会が多い。しかし、中学校に至っては地理的分野「身近な地域の調査」はわずか2割の学校でしか行われていない。中学は、さまざまな理由から実施されておらず、その制約を乗り越えるだけの教員の熱意が欲しい。小学校においても、単に引率しているだけで子ども自身にどれほどの追究意欲があつての見学・調査なのか、疑問に感じる場面もある。教員は野外に子どもたちを連れ出して実社会に触れさせる指導に自信がないのであろうか。「安全面に心配がありますから」「あまり学区のようすを知らないから」と言われると返す言葉もない。学習指導要領に規定されている校外の実地指導が満足に展開されていないのではないかと。もし、十分に展開されていたとしたら子どもの社会科嫌いは防げるはずである。社会科の醍醐味はリアリティにこそある。ホンモノの場でホンモノの事象と出会わせることこそ、最良の教科書はない。そのためにもフィールドワークから考える研究授業を推進したい。

(3) ねらいの明確化

何のためにその場所を訪問させるのか、例えば自動車工場見学を引率しても「何を見てくるのか」「ジャストインタイムで生産効率を向上させているシステムを理解させる」「自動車への期待は何か」「工場で働く人の生産効率を上げていく工夫や努力とは？」などといった社会見学に先立つ「目の付けどころ」の共有化が欠かせない。

今回の石垣小学校の近隣の探索は、明確に「石小近くで観光客が喜ぶ場所を見つけよう」といったねらいの提示があった。子どもたちは、知っている学区を改めて見つめ直すきっかけとなった。

(4) ルート設定と時間配分

どの道を通って見学するのか（ルート設定）、児童の見学時間、飽きさせない時間配分が研究授業として検討されなくてはならない。石垣小学校における授業でも、市街地を歩く授業では、10分間以内の移動時間で訪問先に到着するように計画した。

フィールドワーク授業ではハプニングも付きもの。臨機応変な教師の対応力は授業を校外で行う場合の留意点である。このほか、安全管理やトイレ確保などは当然の準備である。教室から飛び出したフィールドワーク授業が見たいものである。

(5) 薬草いっぱい八重山の庭訪問

小学校から歩いて数分。みやまえ幼稚園裏手にある亀川さん宅のお庭を見学させてもらった。シークワーサー、トラノオ、黒木（三線の材料）、イッペイ、レンブ、ニガナ、パパイヤ、

桑の木、芭蕉、月桃、長命草、マンゴー、千年木、カンナ、オクラ、ブーゲンビリア、ハイビスカス、アマリリス、クムスクチン、大根、朝鮮桜、サンダンカ、オオタニワタリ、ハマボウ、フクギなど多種多様な樹木や草花が栽培されていた。(写真8～9)



写真8 石垣市街地を歩く児童（左）と個人宅の庭を取材する児童（右）



写真9 個人宅の庭に生える亜熱帯の栽培植物を取材する児童と解説する亀川さん

(6) 色彩いっぱい桃林寺見学

江戸時代の初頭である1614年に創建された八重山で初めての禅宗・臨済宗のお寺。山門には仁王像が力づよいポーズで立っている（写真10～12）。子どもたちは、桃林寺・権現堂の歴史の古さと色鮮やかな木彫りの造形に新鮮な驚きを覚えたようである。また、亀川さん宅に生えている健康にいい草や花、実の効用にも興味を覚えていた。石垣市街地に住む子どもたちにとって当たり前風景の中に価値を見い出せた瞬間であった。その後、体育館で撮影してきた写真を模造紙に貼り付け、コラージュ作品を作成していった。

指導に当たった寺本によるコラージュづくりのコツや、マジックの持ち方、タイトルの付け方などの丁寧な助言も功を奏し、見事な作品が出来上がった（写真13, 14）。



写真10 大津波の記憶をとどめる桃林寺の仁王像と解説看板



写真11 文化財として価値の高い権現堂の彫刻 (左：象, 右：獅子)



写真12 改めて文化財の価値に気付く児童

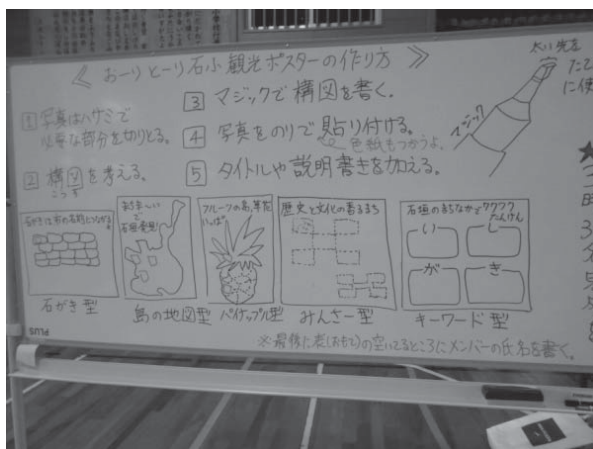


写真13 観光ポスターの描き方を解説したボード



写真14 出来上がった観光ポスターの1例

V 学習後に綴られた児童の作文

学習後、4年生児童に400字詰め原稿用紙を配布し感想文（題：石垣市街地にもっと多くの観光客を呼び込むためには）を30分程度かけて書いてもらった。300文字を超える男女の作文を数例紹介したい。

「ヒミツがいろいろ石垣島 みなさん、この緑がいっぱい海がキレイ、でんせつなど、いろいろある、この石垣島には、あんまりしられていない事がたくさんあります。大きく分けて三つ知られていない事があります。一つ目は、ふだん見ている植物が食べられたり、薬になったり、よもぎや、うこんはおだんごにして食べたり、げっとうは、おもちをつつんだりできます。二つ目は、宮島おんが、石垣島の中心であり、とっても神様がいます。三つ目は、とうりんじにいろいろな動物がいて、守ってくれるのです。そして一番すごいのは、石。ただの石と初めは思いますが、石垣島の名のもと、石だったのです。このように緑いっぱい、海がキレイ、でんせついろいろあるこの石垣島にはすごい事がいろいろあります。だから、いっぱい遊びに来てねー。(4年女子)」

「観光客をよびこむには 私は、観光客をよびこむには石垣島でどのようにしたらいいかを考えました。私が一番最初に思いついた事は、『川平わん』です。私は、川平わんで観光客などが泳げるようにしたらいいと思います。でも、たぶんどきないと思うけど、できたらもっとたくさん観光客が石垣島に来てくれると思います。もう一つ考えがあります。観光客に、食べられる草花や薬に使われる草花を体験してもらえよう活動をやればいいと思います。そうしたら、観光客が石垣島の草花にきょうみを持って、また石垣島に来てくれると思うからです。このように私は観光客に自然とふれあってほしいと思って、この考えを出しました。石垣島でもっといろいろな活動をして観光客がたくさんふえるといいです。(4年女子)」

「石小の周りは観光地がたくさん ぼく達の通っている石垣小学校の周りには観光地がたくさんあります。ふだんは古びただの学校や木だらけのうたき、ただの寺や、ただの庭と思える場所は、実は、歴史を知れば、ぜったい行きたくなります。まず、木だらけのただのうたきは、本当は石垣小学校のしき地も、この宮島うたきのしき地だったのです。宮島うたきは、昔の石垣村、登野城村の中心だったのです。次の桃林寺では、ただの寺に見えますが、実は日本最南端のお寺だったのです。ただの寺だと思っても、場所の事を知ればすごくめずらしく思えます。亀川さんの家の庭では、ただの植物がたくさん植えている庭と思うけど、実は石垣島にしかない植物を育てているのです。たとえば、ソテツ、ヨモギ、ウコンなど全てあります。このように、ふつうと思っても石小の周りには観光地がたくさんあるのです。(4年男子)」

「石垣には、色々なところにたくさんのお花がさいています。また、字石垣には最も古いお寺があって、そこには仁王像がたっています。青い空には鳥やちょうがとんでいます。ちょうの中でもオオゴマダラは、石垣にいるちょうの中でもっとも大きいちょうです。ほかに、がじゅまるの木やふくぎなど沖縄ならではの木が、はえています。石垣は、あたたかい所なので花や木が

たくさんあります。オオゴマダラは、夏にさなぎになります。オオゴマダラのさなぎは、金色でとてもキレイです。夏の花は、ひまわりとキレイな花がさいていて、木はほかのしゅるいの木がはえて石垣は、とってもすてきな所です。夏には、セミもたくさんなっています。こんな石垣島にたくさんのお客が来てほしいと思います。(4年男子)」

「私は、観光客をよびよせるのなら、いくつかに案があります。まずは、植物です。八重山には、きれいな花がたくさんあるし、だれかの庭にも、ふつうに植物があるからです。きれいな植物をしょうかいして、観光客のなかにも植物が好きな人は、ぜひ、きてほしいからです。次は、石垣でちらかっているゴミをみんなで力を合わせてかたづけることです。みんなでゴミをひろって石垣島をきれいにすれば観光客がたくさん来ると思うからです。最後は、こん虫です。石垣島のちょうは、オオゴマダラなので、それをしょうかいしたらいいと思います。ほかにもこん虫はいるのでそれも、しょうかいしたらいいと思います。このように、私はゴミをみんなでひろって町をきれいにし、植物のことも、こん虫のことを、しょうかいしたらいいと思います。(4年女子)」

「石垣島には、石垣にしかない虫がいます。たとえば、イシガケチョウです。このチョウは、羽がイシガケのもようなので、その名前がついたそうです。私たちが身近に歩いている所にも虫がいます。虫は葉の所にいるのでいろいろな葉についています。私の家の庭にもいます。三つ葉のクローバーの葉っぱにはシジミのよう虫がいます。シークワサーの葉にはシロオビアゲハのよう虫がいます。森は木がいっぱいある所や葉がはえている所などいます。たとえば、バナナ公園に行くと見つけられると思います。最近、セセリチョウと言う羽がロケット型で飛ぶのがはやいチョウがふえています。そのセセリチョウは、いろんな葉にとまりますが、森や木のいっぱいある所に来ます。たとえば、センダン草の葉にもとまります。こん虫にきょう虫がある人にとっては、石垣はとってもいい所だとしょうかいしたいです。(4年男子)」

学校の近隣にあるあたり前の文化財が、観光客にとっては魅力的な観光対象であることに気付いたり、島固有の栽培植物や昆虫などの自然資源に着目したりするなど、観光に生かしたいという見方が獲得できた。

Ⅵ おわりに

生活文化の本土化が著しい中、沖縄県の先島・八重山地域は、沖縄らしさが色濃く残っている土地の一つである。八重山そばや石垣牛、透明度の高い川平湾、米原のヤシ林、竹富島の赤瓦民家群、西表島の亜熱帯林、島々にある美しいビーチとリゾートホテルなど観光には事欠かない魅力がいっぱいである。八重山の中で中心となる石垣市は、人口も4万9千人を数え、都市的な施設も十分に発達している。移住者も多く、新空港の開港に伴って益々、入込客や在住人口の増加が顕著になってきている。台湾や上海からの団体観光客も時折、大型クルーズ船で来島している。そうした観光の新時代にあって、公教育は観光を支える人材育成に関与しなく

てよいのであろうか。

観光業に直接携わらなくても観光客と接する仕事は多い。石垣島で成長する子どもたちの将来の雇用の場も確保するためにも観光振興は期待できるジャンルである。観光による収入は、税収も増すことにつながり、福祉や社会基盤整備、文化の振興にも寄与する。八重山の未来を左右する産業こそ、観光業と言ってよい。公教育内容に観光事象をもっと取り入れることはできないだろうか。本実践に見られるように、主体的・対話的で深い学びを、観光を題材に展開できる可能性が高い。

謝辞

寺本による出前授業を支えて頂いた田本由美子前・教育研究所長と快く受け入れて頂いた石垣小学校校長西原貴和子先生並びに4年担任の山田章子、伊藤真哲両先生、八重山小社研観光部会の運営に尽力して頂いた八島小学校大浜謙教頭（現・市教育委員会）、個人宅の庭を児童の見学のために開放して下さいた亀川さんご夫妻に記して深く感謝の意を表したい。なお、本研究は2016年度日本地理教育学会大会（於、慶応大学）並びに、2017年度日本環境教育学会（於、岩手大学）において口頭発表した。また、調査に当り、文部科学省科学研究費基盤研究（C）「学校教育における観光教育の教材開発とカリキュラム立案」（課題番号15K01966）の一部を使用した。

参考文献

- Hawaii Tourism Authority（2005）：Hawaii Tourism Strategic Plan 2005-2015. 58p.
- 大島順子（2010）：持続可能な観光を築く地域における教育のあり方。『ESD（持続可能な開発のための教育）をつくる』ミネルヴァ書房，pp. 104～122.
- 萩巢里菜ほか（2011）：小学校における観光教育の可能性—京都市の次世代教育を対象として—。『日本観光研究学会紀要第26回全国大会論文集』pp. 389～392.
- 佐藤克士（2013）：観光研究の成果を組み込んだ「社会科観光」の授業開発とその評価。『社会科教育研究』118号，pp. 1～14.
- 菊地達夫（2014）：観光を題材とした地理授業の系統化と開発。『北翔大学生涯学習システム学部研究紀要』第14号，pp. 1～14.
- 寺本潔（2015）：4年社会科「わたしたちの県」を観光単元に組み替える提案授業—沖縄県が人気No.1であるわけを考え合—。『まなびと』教育出版，2015年春号，pp. 14～17.
- 寺本潔（2015）：沖縄県の小学校における観光基礎教育の授業モデル構築と教材開発に関する研究。『論叢』（玉川大学教育学部紀要2014）pp. 73～85.
- 寺本潔・中嶋真美・曾山毅・中村哲・小林亮（2016）：小学校からの観光基礎教育のモデル授業構築に関する研究—沖縄県を事例に—。『玉川大学学術研究所紀要』第21号，pp. 1～18.
- 寺本潔・澤達大編（2016）：『観光教育への招待—社会科から地域人材育成まで』ミネルヴァ書房，165p.
- 寺本潔（2016）：沖縄県石垣島の資源を活かした地域観光学習の試み—小学校4年生を対象にして—。『地理学報告』（愛知教育大学）第118号，pp. 99～104.
- 大島順子（2017）：観光の教育力の構造化に向けて。『観光科学』（琉球大学）第8号，pp. 73～86.
- 寺本潔（2017）：『教師のための地図活—地図帳・地球儀・防災・観光の活かし方—』帝国書院，80p.

The Learning Aiming at the Value of Cultivation Plants and Buddhist Temples as Tourist Attractions in an Island: Through a Delivering Class Provided for the Forth Graders in an Elementary School in Ishigaki City, Okinawa Prefecture

Kiyoshi TERAMOTO

Abstract

The purpose of this research is to recognize the value of tourist attractions in Ishigaki City, Okinawa Prefecture as learning resources to facilitate the students' understanding of their own culture. Ishigaki City has a rich amount of various cultivation plants, as well as Buddhist temples as traditional cultural institutes; these resources can be effective learning materials.

A delivering class has been provided for the forth graders of an elementary school in the city. In that class, students has walked around the city area, and, as a result, noticed the value of those tourist attractions to reconsider their own culture.

Keywords: cultivation plant, cultural properties, tourist learning, area resources, machimaai